

「選ぶ楽しさが広がる！家電は1人100色の時代へ」これはインテリア・デザイン関係の雑誌の最近号で眼についたフレーズである。さらに「家電の世界では白や黒といった固定された色から、十人十色の時代を経て、今や1人100色ともいわれる時代になった。・・・そして、カメラの世界でも、ペンタックスからは、ついに100通りのカラーバリエーションを持つデジタルカメラが登場した」という言葉が続いていた。

もともと、個人が自分の好みで選んで使用するはずのカメラであるのに、これまで色のバリエーションが少ないことは、以前から私の気になっていたことの一つであった。たとえば、写真家の亀井良雄さんが写真撮影によるカメラコレクションを狙って出されたという「カメラの肖像 - クラシックカメラ写真館」(日本カメラ社刊)という本には総計100種類ものクラシックカメラが美しく撮影され、掲載されているが、そのなかでボディの貼り皮が黒でないものは僅かに3機種しか見当たらないのである。カメラの色といえば黒以外はほとんど考えられず、木材や光り輝く金属が使われることはあっても、大部分が黒でおおわれていることは基本であった。もちろん、茶色や緑色の貼り皮のカメラが例外的に出されたことも決して少なくなかったし、バルクハイルやヴェラのように緑色を基本色とするカメラも存在した。しかし、大勢としては黒であり、黒以外は「変わり種」としてしか扱われなかったのがカメラの世界であったといつて過言ではない。

この「カメラ故郷に帰る」シリーズのなかで、これまで私は意識的に黒以外の色のカメラを採用しようとしてきたが、結果としてそれに該当したのは26機種のうちに乳白色のアドポケット、栗色のレックス・ルヨ、灰白色のヴェルリサ I、オリーブ・グリーン・ヴェラ IV、ローズ・ピンクのアルファ、茶色リザード革のベビー・リンクスと、ようやく6機種を取り上げることが出来たに過ぎない。なかにはポーランドのアルファのように積極的にカラーバリエーションの展開をはかったものもあり、現在、私のもとは濃淡の別を加えて11色のアルファが勢ぞろいしているという例もある。しかし、ともあれ、大半のカメラ製造会社が従来、色に大きな関心を持たなかったのは、おそらくカメラは黒色という固定観念を脱し切れなかったからであろうし、無難な黒以外の色を積極的に採用しなければならない理由もなかったからであろう。



ワット・スタット入口の黄金の仏像たち

カメラの機能を持たせた「レンズつきフィルム」とでもいうべき今日のトイ・カメラの性能は室内の自然光下でもこれだけの写真がとれるだけになっている。風景は無理であるが3~4mで人物を撮影するにはうってつけのカメラであることが確認出来た。フィルム: フジ スペリア プレミアム 400

と、ここまでくどくどとカメラの色について書いて来たのは、今回、故郷に帰ってもらった、すなわちメード・イン・タイランドと記載されたカメラの色が、これまで他では使われたことがなかったような、あまりにも綺麗なコバルトブルーであり、比較的カラーリングが自由なはずのコンパクトカメラの世界のなかでも十分に目立つ存在と思われたからである。旧い分類でいうノベルティ・カメラとしてタイで作られた、いかにもタイらしいカメラと考えれば、この色使いはまさにピッタリといえるのではないだろうか。ちなみに、バンコクのタクシーはとても色鮮やかに塗られているが、この青色にそっくりのものがある。しかも、このカメラの名前を見て頂きたいのである。ローマ字でAOIと印刷されているが、“AOI”は「青い」ではないかと思われるところが面白い。

以前にはタイへの里帰り撮影に使うカメラとしては、ニコンF80を採用しようと思っていた。ニコンF80は知る人ぞ知る、完全メード・イン・タイランドのカメラであり、これでタイを撮影することに何の不都合もないと考えていたし、このシリーズのなかでもすでにミノルタ・マレーシア工場製のミノルタ・カピオス115をマレーシアへの里帰り撮影に使用した前例もあ

る。しかし、できるだけその国の雰囲気や十分に持ったカメラを使いたいと願って来ているので、このタイの青色を身にまとったAOIをAJCCの会員である台湾の曾望旭さんから一昨年送って頂いたとき以来、タイの撮影にはこれ以外は考えられないことになったのであった。

青いAOIの素性については曾さんもご存知ないとのことであり、私の貧弱な情報網でこれまでに知り得たこともほとんどない。カメラの元箱には「ウルトラコンパクト35ミリカメラ」と書かれてはいるが、先にも述べたように、古い分類ではノベルティ・カメラであり、現在ではトイカメラに含めるべきものであろう。しかし、よく見てみると、短焦点レンズで距離合わせ不要とし、今日の高感度フィルム使用とフラッシュ組込みで露出固定を可能としたうえ、35mmフィルムカメラの基本であるところの、フィルム自動巻止め機構、巻戻しクランク、クイックローディング機構付き、さらにフィルム枚数計自動設定機構までが付いていて、コンパクトカメラの基本的条件が備えられている。その意味は不明であるが、裏蓋には装填フィルム確認用の窓まで付けてある。

いわゆるノベルティ・カメラもしくはトイカメラについてはこのシリーズのなかでマカオ製ハリーナ35と台湾製シヴィカMX-Vの2機種をすでに取り上げているが、それらに比較して、今回のタイ製AOI MF-203の使用後の印象では、トイカメラもここまで進歩していたのかと、あらためて感心させられたことであった。稿を終わるに臨み、今回、タイでタイらしいカメラを使う機会を与えていただいた、曾望旭さんに深甚なる謝意を申し上げる。

(この項おわり)



- AOI MF-203
- 製造地: タイ(製造会社、製造年とも不明)
- ボディ: 完全プラスチック製
- レンズ: 28mm/F 9
- 寸法: 幅119×高さ65×厚み34mm
- 重さ: 125g
- ファインダー: 逆ガリレオ式透視ファインダー
- シャッター: 単速(約1/100秒)
- 使用フィルム: 135
- 画面サイズ: 24×36mm
- カメラ形式: 35mmコンパクトカメラ
- ボディの色が鮮やかなコバルトブルーであることが特徴的である。